「附中タイム」の取り組み

1．実践の概要

言語活動をより充実させるために、昨年度よりの取り組みとして週に１時間全教員により「附中タイム」を実施している。これは従来の教科の枠を外し、言語活動に特化した学習を行うものである。第１学年については言語活動の土台作りのため、従来の学級のままローテーション授業を通年で実施、第２～３学年についてはより言語活動を充実させるため、前期後期制で生徒の選択による少人数学級を再編成して実施する。

複雑な思考は言語がなければ不可能であるため、言語に関する能力を育成していくことで、より思考力・判断力・表現力が高まることが期待される。そのため各教科では教科特有の言語を用いてそれぞれの教科における思考力・判断力・表現力等の学力の向上をはかる。しかしその基礎となるべき言語に関する力そのものが、現状では十分に身に付いているとは言い難い。確固たる基礎を築いてこそ、それを土台として各教科における学力が有効に育成されるであろう。

具体的には文章作成の技術の向上、豊かな言語感覚やコミュニケーション力の育成等が土台として求められる。もちろんそれらは国語科においても取り組まれるが、「附中タイム」によりそれを補完し、また言語を通して自我の形成や感性・情緒の基盤づくりも目指す。

本年度の「附中タイム」各講座（前期）

講座名	担当者
1 世界に触れよう！（１年）	松井　悠歌
2 過去～現代の走り方を学ぼう（１年）	森田　祐介
3 NEW ゲームをプロデュース（１年）	砂田　謙佑
4 震災発生から 72 時間（１年）	中西　遼・和田　雅博
5 ソーシャルスキルを身につけよう（１年）	平山　ちさと
6 ドキュメンタリーを作ろう	今西　千景
7 図鑑を作ろう	多田　若菜
8 新聞を読もう！	飯島　知明
9 歴史新聞をつくろう！	南岡　俊之
10 外国の人にＮＩＰＰＯＮを発信しよう！	吉田　昂平・山形　傑
11 陸上競技	谷　直樹
12 おもしろコマ撮り動画制作	中馬　真里亜
13 スポーツの宣伝部長になろう！	小林　佐知江
14 English Newspaper	板野　麻由美
15 iPad で映像表現	藤井　宏明
16 みんなでものづくり～２×４材を用いたものづくり～	高河原　健

本年度の「附中タイム」各講座（後期）

講座名	担当者
1 世界に触れよう！（１年）	松井　悠歌
2 過去～現代の走り方を学ぼう（１年）	森田　祐介
3 NEW ゲームをプロデュース（１年）	砂田　謙佑
4 震災発生から 72 時間（１年）	中西　遼・和田　雅博
5 ソーシャルスキルを身につけよう（１年）	平山　ちさと
6 ドキュメンタリーを作ろう	今西　千景
7 図鑑を作ろう	多田　若菜
8 新聞を読もう！	飯島　知明
9 地理新聞をつくろう！	南岡　俊之
10 外国の人にＮＩＰＰＯＮを発信しよう！	吉田　昂平　山形　傑
11 陸上競技	谷　直樹
12 おもしろコマ撮り動画制作	中馬　真里亜
13 スポーツの宣伝部長になろう！	小林　佐知江
14 English Newspaper	板野　麻由美
15 iPad で映像表現	藤井　宏明
16 みんなでものづくり～２×４材を用いたものづくり～	高河原　健
17 英語でミュージカルを歌おう！	吉田　雅子・小川　美紀

２．成果と課題

従来の教科の枠を外したことにより、それぞれの担当者が持ち味を活かして自由な言語活動の取り組みを行うことが可能となった。そうした取り組みにより、思考力・判断力・表現力の向上やコミュニケーション力の育成等に一定の成果があったと言える。

しかしながらより言語活動の充実を図るためには、

１．各講座内容の精選

２．ティームティーチングを含む指導の在り方の検討

３．評価規準の作成を含む評価の在り方

４．各教科・領域との積極的な連携

が求められる。

これらの研究を進めながら、次年度はより言語活動を充実させていきたい。

世界に触れよう！

松井　悠

1．ねらいと内容

今、ここにいる自分の世界は、当たり前である。人が変われば、場所が変われば、考え方が変われば、自分にとっての当たり前は当たり前ではない。自分の持つイメージと、実際は違う。先入観で捉える(ではなく、自分の目で見て確かめたものこそ実際である。『当たり前であることは、当たり前ではない。』『イメージにとらわれない』、この2点を捉えさせることをねらいとして、世界を視野にし、体験型ワークショップを用いて全3時間の授業を考案・実践した。

授業内容は、以下のとおりである。

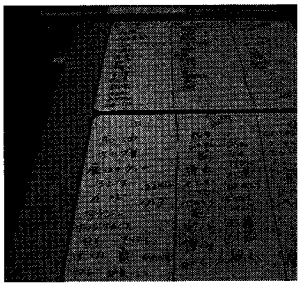
＜1時間め＞

・1番行ってみたい国をふせんに書き、世界地図に貼ってみんなの行きたい国の傾向を知る。

・結果が先進国に偏っていることから、なぜそのような現象が起こるのかの理由を考え、その中でもインドにフォーカスをあてる。

・“インド”のイメージをブレインストーミングする。

・インドの文化・学校について触れる。



＜2時間め＞

・【世界がもし100人の村だったら】のワークショップを行う。

○世界は高齢化？少子化？　　○日本は高齢化？少子化？

○世界の言葉で「こんにちは」　　○世界の富は誰が持っているの？

＜3時間め＞

・【世界がもし100人の村だったら】のワークショップの続き。

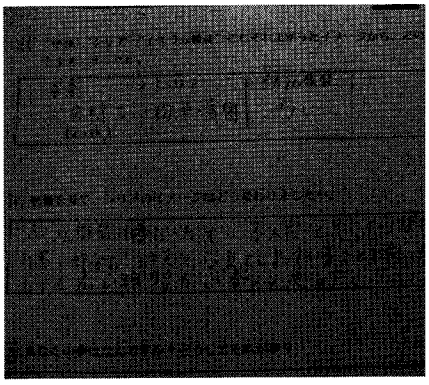
○文字が読めないこと

・【世界がもし100人の村だったら】の原文を読む。

・“中東”“シリア”“イスラム教徒”のイメージを1分間ブレインストーミングする。

・シリアについて触れる。

・イメージで変わったことをあげる。



2．成果と課題

自分自身が触れたことのない国へのイメージは、本・メディア・インターネットなどから得られた(報からのイメージにすぎない。それを、写真や映像などを通して、実際を知っている人間のリアルな(点から本物を伝えることで、イメージ通りであったこと、違っていたことなどの現状を伝えられ、そ(ぞれが持っているイメージの変化を見ることができた。

ワークショップでは、楽しみながら世界の現状を体感させることができた。それと同時に、様々な(場を体験することにより、自分の当たり前が当たり前でないことに気付かせることができた。

一方、1人で41人のファシリテーターをすることに難があり、やりづらい点もいくつかあった。また

過去～現代の走り方を学ぼう

森田　祐介

１．ねらいと内容

【ねらい】

昨年度、子供の体力が向上傾向にあると文部科学省から発表された。発表内容には子供が運動への「興味・関心の高まりがある」と明記されていた。そこで 1 限目の授業でアンケートをとると、「走ることは好き・速く走りたい」という思いはあるが、「走り方(フォーム)に関心がない・または考えたことがない」と意見する生徒が多くいた。その様な意識の改善からスタートし、興味を育むために「過去から現代の走り方」について学び、学習した複数の走り方を実施する。また中学校学習指導要領保健体育編の陸上競技・短距離・リレーでは、「合理的なフォームを身につけたり～」とあり、自分に適した走り方を見つけ、身につけることが走力の向上につながると考えられる。

【内容】

１限目：パワーポイントを用いて、歴史・過去から現代の走り方を学習

２限目：けやき坂で過去、現代の走り方（3 種類）を実施

３限目：前時の復習と 3 種類の中から適したものを選択しタイム測定、ワークシート記入

２．成果と課題

【成果】

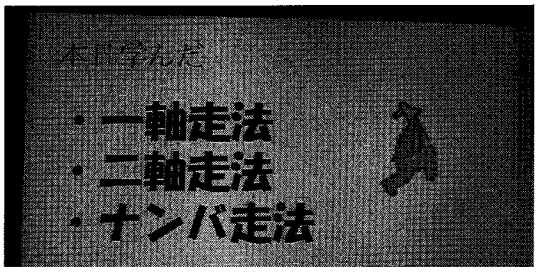
アンケート結果から見られた「走り方への関心」を高める事を重視し、パワーポイントでは生徒が積極的に授業参加できるよう映像を工夫し学習した。それにより 2 限目以降は積極的にかつ楽しみながら運動を実施しているように感じた。3 限目のタイム測定では自分に適した走り方を選ぶことにより、フォームを意識すること・速く走ることなど目的を明確にすることができた。ワークシートからは「過去の走り方を知らなかったので興味が湧いた」「自分に適した走り方を見つけることができた」「今後、自分で調べて走り方を研究したい」と前向きな意見が多く見られた。

【課題】

・評価規準の明確化が必要であると感じた。

・１クラス 3 時間しかないので、急激な技術の向上は難しい。

・知識を増やすことができたが、その後の経過観察ができない。



NEW ゲームをプロデュース

砂田　謙佐

1. ねらいと内容

ねらい：様々な授業の中で言語活動を取り入れ充実させていっているなか、自分の考えをまとめ発信する力は重要であると考え、その発信をスムーズにするためにはトレーニングが必要と考えられる。そこで、できるだけ多くのアイデアがでるように生徒たちが楽しめる内容「ゲームを考える」という設定をした。

内容：①NEW ゲームを考え、企画書を作る

→タイトル、所要時間、必要人数、必要物品、注意事項（事故防止）、

②各班によるプレゼンと審査

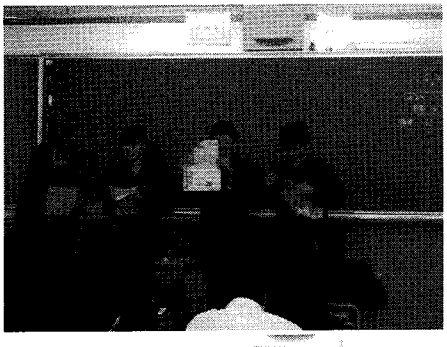
→ゲーム内容（楽しさ、わかりやすさ、時間）、プレゼン内容を審査

③審査結果発表と選抜ゲームの試行、感想

→実際に審査で上位に選ばれたゲームを試行

2. 成果と課題

言語活動という意味では、課題が生徒たちにとって楽しく考えていける内容であったので活発に行えていた班が多く見られた。また、各班がプレゼンにすることで皆から評価をされ代表が決められるといった点から、いかにわかりやすく伝えるかということに工夫する姿が見られた。課題としては、タイトルのなかにある『NEW』といったところで考えると既存のゲームのアレンジなどが多く、斬新的なアイデアを引き出すことができなかったという点である。そのためには、誰か一人の案を取り上げ決定という流れでなく、それぞれのアイデアを融合させるなど一工夫加えるために、もう少し企画の時間を長くとる必要があったと考えられる。



附中タイム『NEWゲームをプロデュース』

【企画書】

タイトル	かくれんぼ
目的	仲間づくり
場所	教室
所要時間・必要人数	3人～6人
必要物品	考える頭
注意事項（事故防止の注意点）	・頭がパンクしないようにする!! ・正直
どのように行うのか（誰でもわかるように。必要に応じてイラストも入れるとよい。） お題 その他：おでん すきやき	お題：(例) カレーの具 りんご　ごはん　しょうが ①カレーの中に入れる具を、それぞれ考える。 ②鬼が、30秒間、自分が考えてる具材を言いつづける。

ソーシャルスキルを身につけよう

平山ちさと

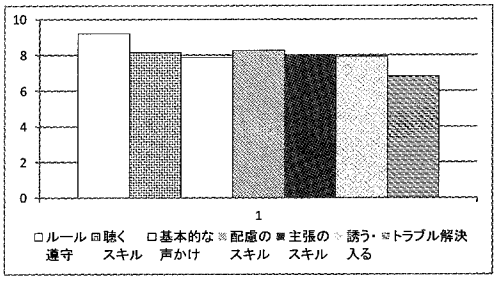
１．ねらいと内容

ソーシャルスキルとは、社会の中で他者と交わり、共に生活していくために必要な、後天的に身につく能力である。「あいさつする」「お礼を言う」「謝る」などは、幼児の頃から家庭のしつけの中で当たり前のように身につけてきているソーシャルスキルの一端である。このようにソーシャルスキルは、年齢とともに自然に身につけていて当然のものと長い間考えられてきた。しかし、社会の変容とともに子どもの所属するコミュニティ内での関係性が希薄になり、自然に放置していては、簡単にスキルを獲得できなくなってきている。それは本校においても言えることである。

このソーシャルスキルの獲得と、精神的な発達がちょうどよいバランスを取ってこそ、充実した中学校生活を望むことができ、ひいては学習環境を整えることにもつながる。あまりに限られた時数ではあるが、社会的に大きく成長する中学１年生に有効であると考えて、ソーシャルスキルの授業を展開することを考えた。

まず、最初の授業が始まる前に、学年全員に対してアンケート調査を行い、ソーシャルスキルの自己評定をさせた。（図１）

（図１）



概ね高い数値で、集団としては全体にソーシャルスキルを身につけているように感じられるが、『自己紹介』のように積極性を必要とするものや、「カッとしない」など、『トラブル解決』に必要なスキルについては課題があることが読み取れる。

	例	考えたセリフ
背景	あやまりの ごめんね。 本当は… いっしょに…したいけど	ごめん。
理由	急いでいるから 時間がないから 用事があるから	急いでるから
断り	帰ることができない。 ～できない	一緒には帰れない。
案	代わりの 明日なら～できるよ。 こんど～してくれるといいな。	明日なら一緒に帰れるよ

この結果を授業の初めに口頭で伝えて、「何故ソーシャルスキルの授業が必要なのか」を生徒一人一人が意識して授業に臨めるようにした。

各クラスで授業として展開したのは３時間ずつ。いずれの授業でも「身の回りによくある状況」で、しかも「ちょっとした行き違いが生じやすい」場面を想定した。

第１時は「友だちから頼まれたことを断る」スキルのトレーニングをした。

「自分が借りたのではない図書を返却するように頼まれたとき」「先生から呼び出された友だちに、一方的に待っているように言われたとき」と、中学生の日常生活によく見られる状況を設定して、どのように答えるかを考えさせた。

時の感想

当たり前のようだけど、相手を傷付けずに断るのが自分にはあまりできていなかったと思う。分かっていても、キツく言ってしまうので、今後の課題としてしっかり考えたいと思った。

場面2 メモをなくしてしまったので、明日の宿題がわからなくなりました。仲良しのAさん(Aくん)に聞きたいのだけれど、AさんはBさんとおしゃべりに夢中です。あなたはどうしますか。

謝りの言葉	ごめんね、ちょっといい？
理由	メモなくしたから明日の宿題がわからなくて……
おねがい	ごめんなら教えてくれない？
自分の気持ち	教えてくれると助かるんだけど……。

相手の感想：親切で言う気になれる。

本時の感想：言葉に加えられる工夫がいっぱいあると知ってびっくりしました。またそのような球を少しだけでもつかるだけでこんなにふんいきが変わったのですごいと思いました。これからは相手が不快な思いのしない頼み方をしたいなあと思いました。

第２時のワークシートより

第１時と逆の設定に感じられるが、根底に流れるものはほとんど同じだということに気づかせることができた。

第３時はロールプレイを多く取り入れて「人の話を上手に聴く（傾聴）」ことについて考えた。

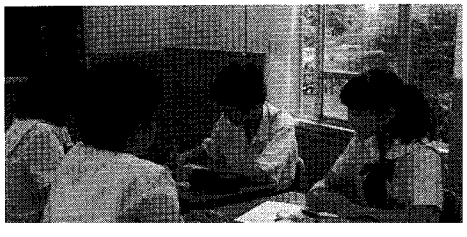
ロールプレイは３通り。「無表情で聞く」・「話にブレーキをかけて聞く」・「傾聴する」の３通りを４人組で話す者・聞く者・観察する者にわかれて実施し、それぞれの立場から感じたことを書き留めた。

第１時・第２時でもロールプレイを取り入れたが、生徒は照れて、設定した状況とは異なった演じ方をするような場面を見かけた（無表情でいるべきなのに、声を立てて笑っているなど）。ロールプレイとしては不十分であると感じたが、授業後に回収したワークシートには、「演じ方を少し変えるだけで、その場の雰囲気がこんなにも変わるとは思っていなかった。」という意見が多く書かれていた。役割（ロール）を演じ切れていなくても、この授業の目的はある程度果たせたと言えるだろう。

２．成果と課題

生徒のコミュニケーション力や社会性がこの授業で高まったかどうかを語るのは早計であるが、普段当たり前に用いていることばについて、見直すべき余地がまだまだあることにはどの生徒も気づきがあった。

授業でも繰り返し生徒に言ったことであるが、ソーシャルスキルとは人がこの世に生を受けて生き続ける限り模索し続けるべきことである。そのスキルは場面と相手によって無数に存在する。しかし今回授業でその一端を学んだ生徒達は、意識的に、意欲を持って今後もことばと関わり続けていくであろう。



2 聞きあい実験

	A 聞き手のポイント	B 話し手の気持ち	C・D 観察者の発見
無表情・無反応	ひたすら反応しない・相手を見つめる・無表情	ちゃんと聞いてないようにみえるしゃべってて楽しくない	
ブレーキ	よそ見・ため息・関係ないうなずき・話を取る・薄ら笑い・過剰なうなずき	(あこっている)(いらついている)	Aが聞いていないように見え、方がうことを考えているように見える。
傾聴	相手を見る・適度なうなずき・「へえ」「そうなんだ」・言った言葉を反復・相手の身になる(共感)		

聞き手を演じて…：とても良い感じで話が進んだ。相手も自分も気分が良かった。

本時の感想：話すことよりも聞くことのほうが大切だということを知った。話は聞くということがあってからそうつなものだと思った。（言葉のキャッチボールとよくいうけど聞くことがあってこそできると思った）話すことも大切だけど、聞くことも同じくらい大切だと思った。

本時の感想：実際に、話し手、聞き手などを演じてみて、聞き手の態度によって会話の雰囲気がとてもかわるんだな、と改めて思いました。聞き手がしっかり役目をはたすことで、会話がかなりもっと言っていいほど、聞き手は大切だなと思いました。私も今まで以上に聞くことを大切にしたいです

ドキュメンタリーを作ろう

今西　千景

１．ねらいと内容

ねらい：①テーマに即して、自分で考え、調べ、まとめ、伝える力をつける。
②協同作業を通してコミュニケーション力を高め、思考力・表現力を深める。

内容：　「環境」または「ふれあい」をテーマにドキュメンタリー作品（映像）を制作する。

本講座は、パナソニックの、小・中学校の子どもたちを対象とした教育支援プログラムであるＫＷＮ（キッド・ウィットネス・ニュース）への参加に依拠した講座である。ＫＷＮからは、機材の貸し出しや技術的サポートが受けられ、最終的には作品をビデオコンテストに出品するというゴールも用意されている。掲げられているテーマが、生徒が追求するものとしてふさわしいことと、様々な教科・領域で学んできた知識や技能が活用できることから、附中タイムでの実施を決めた。

２．成果と課題

「夏休みも活動します。」というオリエンテーションの言葉に、生徒たちは本講座選択を躊躇したようで、講座希望者が少なかった。ドキュメンタリー制作にはシナリオ担当やディレクター、カメラマン、音声等さまざまな役割が必要である。兼務することでその問題は解消したが、一人ひとりの負担が大きくなってしまった。

取材に時間がかかると思われたので、通年の講座に設定した。生徒たちは、テーマを絞ることに予想以上に時間をかけてしまい、実際に取材を開始した時期が遅く、夏休みの期間を有効に使うことができなかった。結局考え抜いたテーマは「河川の環境問題」という、学校外の取材を多く必要とするものになった。附中タイムの授業時間の中で、猪名川河川事務所を訪れ、お話をうかがったり、地元でボランティアとして「河川レンジャー」をされている方に、学校に来てお話をしていただいたりしたが、取材も撮影も編集も全てを週１回の授業の中で行うことは困難であった。

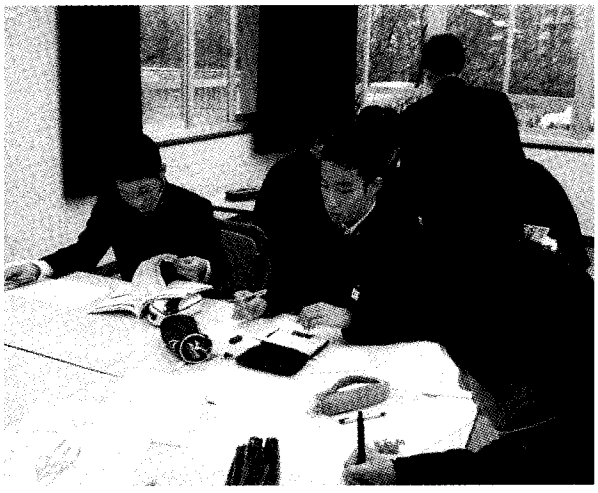
そこで別日に猪名川の様子を数か所撮影しに出かけたり、放課後に編集作業を行ったりした。生徒の負担は大きくなってしまったが、生徒たちは非常に楽しそうにとりくんでいた。やはり、一つの作品をみんなで作り上げる過程は、たいへんではあるが、やりがいを感じるのであろう。結局、１月の作品提出には間に合わなかったが、作品を完成することはできた。

テーマ決めや絵コンテ書きなど、一つひとつに話し合いが必要であった。その結果が作

図鑑を作ろう

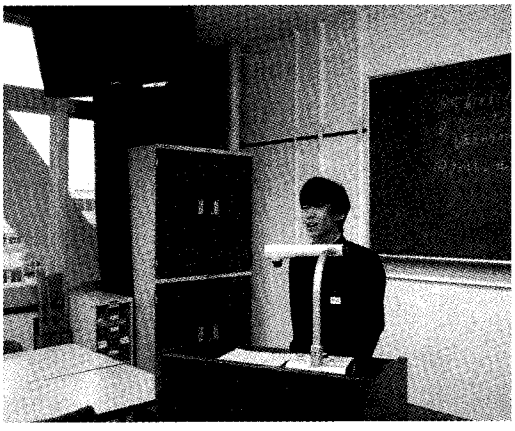
多田　若菜

1．ねらいと内容



今日、子どもたちが身近な生物と触れ合う機会が減少している。その中で学校に生息する植物は身近な生物の一つである。そこで校内の植物に目を向け、触れることで身近な植物に興味を持つことを期待する。また、興味の幅を広げるために校内の植物だけでなく、様々な種類の植物図鑑に触れ、テーマ・構成から考えて図鑑作りを行うこととした。

具体的な取り組みとしては、



①校内の植物・植物図鑑に触れ、テーマを設定する。

②テーマによって選んだ植物の情報収集をする。

③どのような表現方法を使うのか考え、構成を練る。

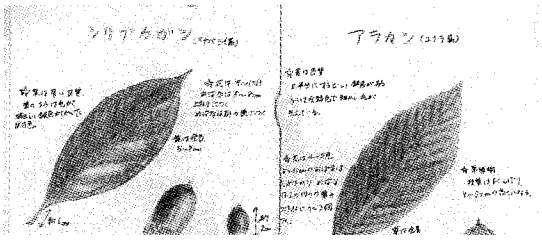
④決定した構成に沿って、植物の絵・説明を書く。

⑤できあがった図鑑を交換し、他者からの批評を受ける。

取り組み④においては、テーマによって調べた情報をただ書き写すのではなく、選んだ植物の説明を考えるところから課題とし、植物の魅力を表現することに重点を置く。そして④～⑤の作業によって、自らの表現を深めることを目指す。

2．成果と課題

数え切れないほどの多くの植物が存在することを知り、その中から自分が伝えたい魅力的な植物を選択することができた。そこからテーマ設定を行い様々な種類の図鑑や他者の図鑑に触れることを通して、オリジナルキャラクターや地図を用いる等の工夫が見られた。個人で構成を練っているときにも他者と意見交流をする姿が多々あった。



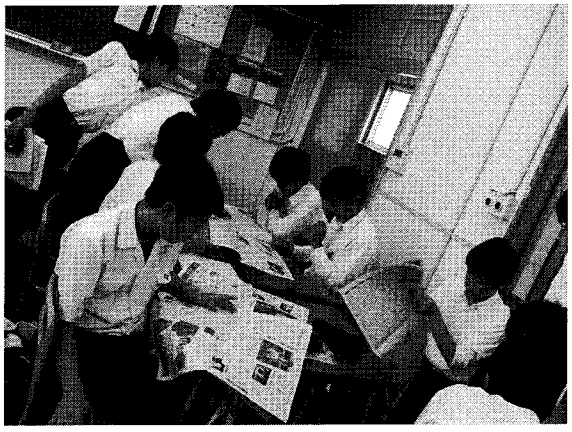
しかし、取り組み④においての植物の説明を考えて書くことが容易でなく、図鑑からただ抜粋するだけになることがあったので、テーマ・構成に

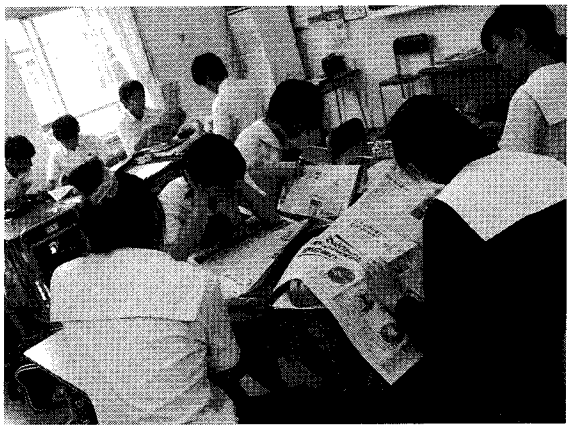
新聞を読もう！

社会科教諭　飯島 知明

１．今年度のねらいと内容

平成 24 年度から全面実施される新中学校学習指導要領社会科の目標に、「 ～諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、～ 」とあり、その内容の取扱いについては、「 地図や年表を読みかつ作成すること、新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ活用すること 」とあることから、今後さらに飛躍的に発展することが予想される高度情報化社会に対応すべく、生徒自らが社会的事象を見い出し、諸資料（ここでは主に新聞）を適切に収集、選択、判断、処理、活用する力の向上を目指し、『 新聞を読もう！』を開講した。





２．成果と課題

何かと多忙な中学生が、この講座において新聞（毎日・朝日・産経・読売・日経・大阪日日・京都・神戸・英字など）を５０分かけて読み込んだり、仲間と社会的事象について議論したり、または複数紙を比較することは新鮮だったと同時に、社会に対する自らの考えや主張、反論、批判などを思考し、練り上げる場ともなったことはたいへん有意義であったように感じる。さらに、それらの活動を通して思考した自分の考えを文章化し、最終的には新聞社への投稿という形で表現することで、まさに社会科が目指す『 思考・判断・表現 』活動となった。

新聞社に採用された投稿（日付は新聞掲載時）

平成２５年１月	朝日新聞	「テロリストには通じない核抑止論」	中学二年生男子
平成２５年３月	朝日新聞	「中国の汚染物質の飛来について」	中学三年生男子

など平成２４年度は計６名が採用

歴史新聞をつくろう！　地理新聞をつくろう！

南岡　俊之

1. ねらいと内容

～ねらい～

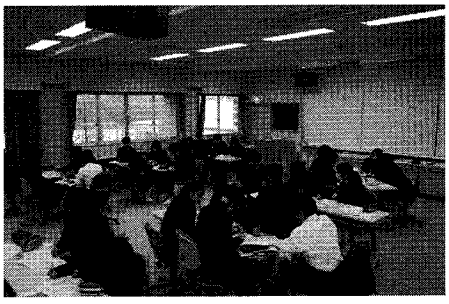
平成 20 年 1 月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申において、①基礎的・基本的な知識・技能の習得 ②思考力・判断力・表現力等の育成 ③学習意欲の向上や学習習慣の確立などを基本的な考え方として、学習指導要領の改善の方向性が示された。生徒はこれまで、授業で地理や歴史の学習を通して、基礎的・基本的な知識、概念や技能を習得してきた。しかし、既習内容を踏まえて生徒自らが興味・関心に沿って課題を設定し、追求する時間はそれほど多く確保できていなかった。そこで、今回の附中タイムでは「新聞」をつくることを通して、（1）自ら設定した課題の追求（2）資料を適切に収集、選択、処理、活用できる力の育成（3）発表を通したコミュニケーション力の育成（4）今回の学習を通してさらに学習意欲を高めることをねらいとした。

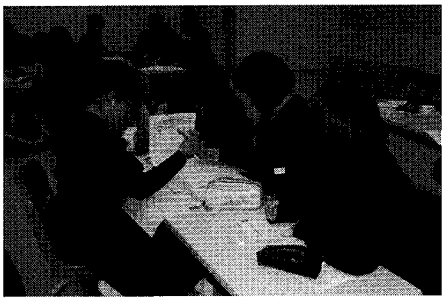
～内容～

・自らの興味・関心に沿って、新聞にする課題の設定（歴史的事象や調査する国の決定）。

・インターネットや書籍などから情報を収集し、模造紙などに新聞形式でまとめる。

・少人数グループや全体で発表する。





2. 成果と課題

～成果～

自分の興味・関心があるものについて追求していく楽しさを実感することができた生徒が多かった。また、地理新聞などでは、今まで行ったことがなかった国だったが、今回の講座を通して、さらなる課題追求のために一度行ってみたいと考える生徒もいたのは大きな成果であったと思う。

～課題～

生徒によっては課題の設定が不十分で、単なる調べたことの羅列で終わり、様々な資料から多面的・多角的に考察することができていないこともあった。どの生徒もしっかりと課題追求

外国の人にNIPPONを発信しよう！

吉田　昂平　　山形　傑

１．ねらいと内容

●ねらい

二十一世紀は知識基盤社会化やグローバル化が進む時代である。このような時代であるからこそ、世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力、自らの考えなどを相手に伝えるための発信力やコミュニケーション力の育成が必須である。しかしながら、普段の授業ではこれらのそれぞれの資質や能力の育成はできても、身に付けた能力を総合的に発揮する場を与えることは難しい。そのため、本校の研究テーマでもある「自立し協同する力の育成」を主題として社会科と英語科における教科横断型の授業を実施し、双方の特性を活かすことで総合的な能力の育成につながると考えた。

授業全体を通した目標を設定する際には社会科と英語科における学習指導要領を参考にした。社会科学習指導要領にある中学校社会科の目標には「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め」とある。また、英語科学習指導要領にある中学校英語科の目標には「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」とあり、ここから本講座の主なねらいを「自立し協同する力の育成」「愛国心の醸成」「外国語を通じたコミュニケーション能力の向上」の三点に設定した。

●内容

前期―①ブレインストーミング【下図参照】を行い、海外に日本が発信できるものを見付ける。班ごとにテーマを設定し、調べる内容の役割分担を行う。班のメンバーそれぞれがテーマについて追及した内容を１枚のレジュメにまとめ、中間発表を行う。

②中間発表でのレジュメの内容をもとに日本への旅行プランを企画し、英語のパンフレットを作成。そのパンフレットを用いてポスターセッション形式による発表を行い、互いに評価をして一番人気の旅行プランを決める。

後期―①日本の文化を伝えるという観点から、班ごとにシンガポールの交換留学生を楽しませるための遊びを考え、時程を含めた具体的な内容を計画し、実践する。

②班ごとに日本の歴史における時代を設定し、その時代をメインとした劇を考える。日本史が凝縮された講義の後、台本を英語で作成。完成後は社会科教諭と英語科教諭による表現内容の確認、ＡＬＴと英語科教諭の発音・文法の確認を受け、発表を行う。

【図】ブレインストーミングの実施内容

１．机に模造紙を置き、「日本」をキーワードとして中心に書き、一分間で連想して書き込む。	２．ローテーションで次の机へ移動し、一分間で連想して追加していく。	３．班の数だけ繰り返し、自分の班に戻ってきた際、置かれている

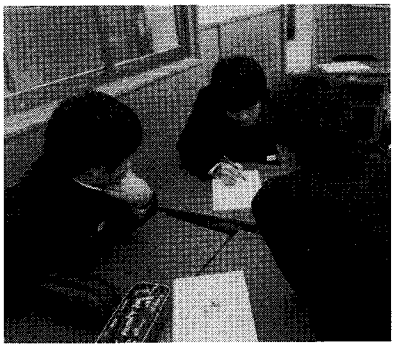
２．成果と課題

本講座では協同的な学びが多くの場面で見られ、グループでの活動で学習が活発化していたようである。特に他学年の生徒同士が協同することで学び合いが多く生まれた。そして、互いにフォローしあえる環境が整ったことで、分担された仕事への責任が増し、個人の作業の質の向上につながった。話し合いなど、生徒同士のコミュニケーションの過程で多くの意見が活発に交わされる中で、相手の意見を尊重しつつも自分の思いを積極的に伝える態度が育まれていた。

一方で、社会科と英語科の融合性が弱かったことが反省として挙げられる。生徒へのアンケートで「社会と英語が融合していたか？―はい・いいえ」という質問をしたところ、５０名が「はい」と返答したのに対して８名が「いいえ」と答えた。この８名のその他のアンケート結果を見たところ、「ブレインストーミングや話し合いが日本語でしか行われなかったことが残念だった。」という意見や「日本についての知識が思ったよりも乏しかったので発表のときに苦労した。」といったことが挙げられていた。

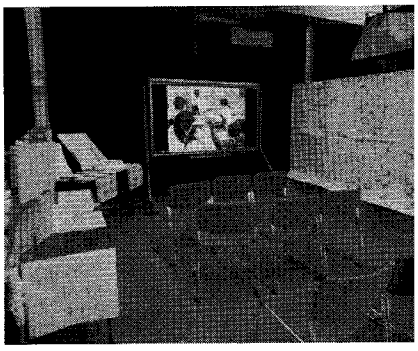
今年度の反省より、発表だけでなく、話し合いや作業の段階で英語を使用できるようになることが必要と考える。作品や劇を創り上げていくプロセスの中で英語を使用することで、より実践的（発表でも活かされる）な英語を学び、使用する能力が必要と思われる。しかし、それを可能にするだけの英語運用能力がないことが現状であるため、「外国語を通じたコミュニケーション能力の向上」が課題のひとつと言える。これらの課題を克服するためには、段階的に英語を用いることが効果的と言えるだろう。また、日本という国について見つめるだけの知識を普段の授業から培われていない生徒が少人数存在したことから、優れた文化の継承と創造に尽くす態度を養うことも「愛国心の醸成」を図る上での課題のひとつである。そのため、授業全体における社会科の要素を増やし、日本について理解を深める時間を設けることも必要である。

↓パンフレット作成の様子



↓劇の練習の様子

↓文化祭での展示



↓振り返りシートの生徒の感想

今回の授業を通して、外国の人は全く日本の文化を知らないこと、でもそれを外国人に伝えるのにはただ説明するのではなく、ジェスチャーや飽きさせない工夫が必要だとわかった。

社会と英語の融合をしたのは初めてで、新鮮で、楽しかったです。
それぞれの時代に起こったことを、オリジナリティたっぷりの劇にしていて、すごかったです。

「走り」を科学する

谷　直樹

1，ねらいと内容

陸上競技、特に“かけっこ”は学校行事や体育の授業などでも触れる機会が多く、日常生活において非常に馴染み深い話題である。前年度、リレー競技を題材として「陸上競技と数学」という題材で授業を行ったが、生徒自身は、普段“なんとなく走っている“のが現状で、速く走りたい！と思ったときに、どのようにしたらいいのか実際は”よくわからない“のが現状である。そこで、実際に自分の走りや友人の走る映像やプロ選手の走る映像を分析し、共通点や相違点を見出し、議論し、その中で、”速く走る為には“という生徒にとってとても興味深い課題を追求させた。

はじめ 3 時間は、様々な資料を収集し、情報収集にあたった。その後、測定計画を立てた上で、グラウンド・けやき坂等で検証の為の動画撮影を行い、生徒一人ひとりが、数学や物理学の知識を活用してその検証をおこなった。

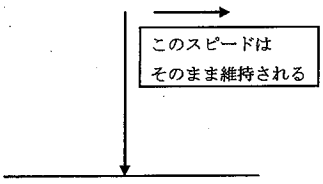
2，成果と課題

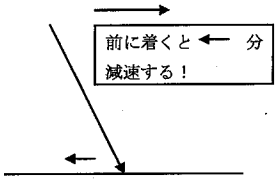
生徒は、身近な話題（かけっこ）の中でも数学や物理学を活用して考えることができることに気付き、意欲的な追求活動を行うことができた。また、情報を交流し、議論する段階においては、その根拠を論理的に説明する事ができる力が必要となり、既習事項に対する理解を深めるとともに、数学や物理学を用いて表現したり、考察する能力も養うことができた。

◎ 速く走るためには？

・ 足の着地を重心の真下にする。

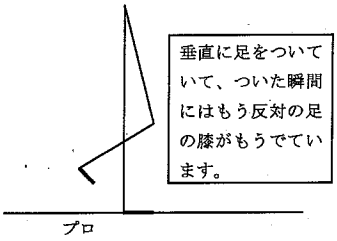
足の着地はスピードに乗っているとき、ブレーキをかけないようにつかなければ早く走れません。前についてしまうとその分ブレーキがかかってしまいます。

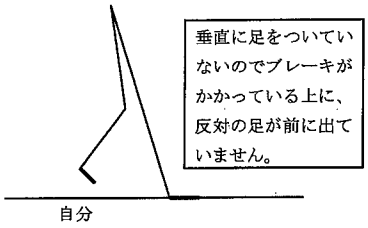




・ 足を早く前に出す。

走っているとき、長い間足をつくよりもすぐ離して足を入れ替えたほうがブレーキはかかりません。プロの足と自分の足の動かし方を比べると下図のようになっています。





・ 足首を固定する

着地の際、足が固定されていないと、上の右図のように斜めに着地し、ブレーキがかかってしまいます。固定したままじゃ加速できませんが、ここでは十分にスピードに乗っているところでの状態です。そのスピードを殺さず、真上への反発力をもらうだけでスピードを維持できるのです。足首を 90 度で固定すれば、真上にしか

おもしろコマ撮り動画制作

中馬　真里亜

1．ねらいと内容

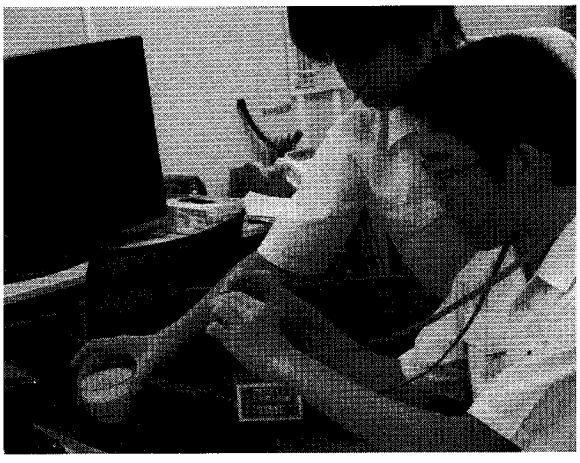
集団思考の作品化と、学校という空間を使いながら、身体を動かし、多角的に作品を見渡す力を育成することをねらいとする。

昨年度実施した内容に加え、「ありえない（現実的でない）」視点で追究することを主眼に、静止画を撮影させた。その他は前年度と同様に、600 枚程度撮影した静止画を、ソフトを使って編集し、動画として再生できる形に仕上げ、鑑賞する内容である。

↑魔法を使ったら…と想定した作品

2．成果と課題

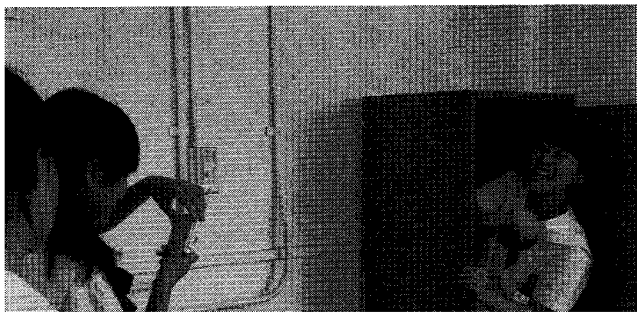
３人～７人程度の班を 12 班つくり、それぞれが「ありえない」視点を追究した。作品の傾向としては、①黒板やノートなど、２次元の世界に入り込むことができる②しかけがない状況で物を消したり、移動させたり、浮かんだりすることができる③ホラー映画のように、実体がない存在を取り扱うことができる④静物が生きているように見せることができる、の以上４点に絞られた。



↑物が勝手に動くように見せる撮影を追究

表現は短編映画のように物語がしっかりとした作品と、視覚的に不思議な印象を与える映像作品に分かれる。短編映画として取り組むなら、徹底した設定でより完成度が高まると考えられる。方向を絞って成果を比較していく形に展開することも検討したい。

↓瞬間移動を映像化



↓重力に逆らって動く不思議さを追究

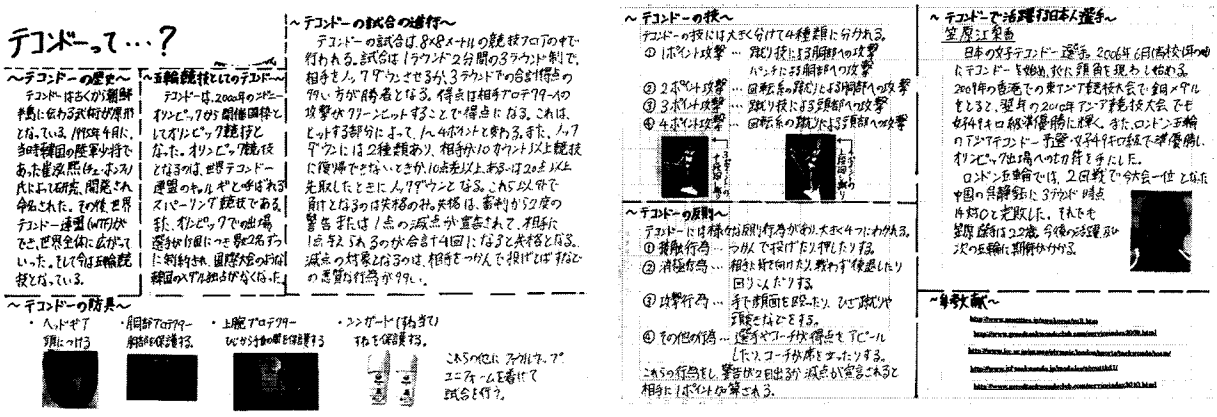
スポーツの宣伝部長になろう！

小林　佐知江

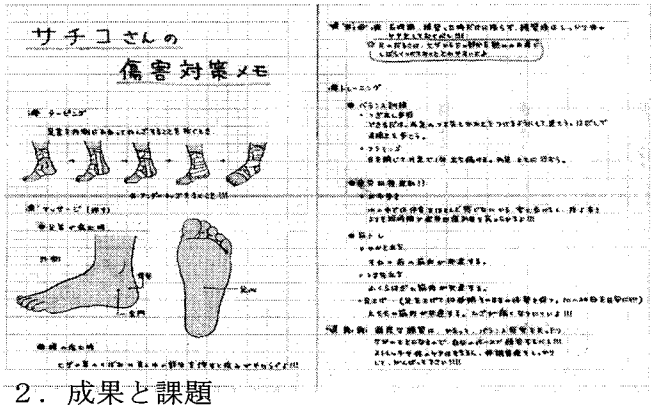
１．ねらいと内容

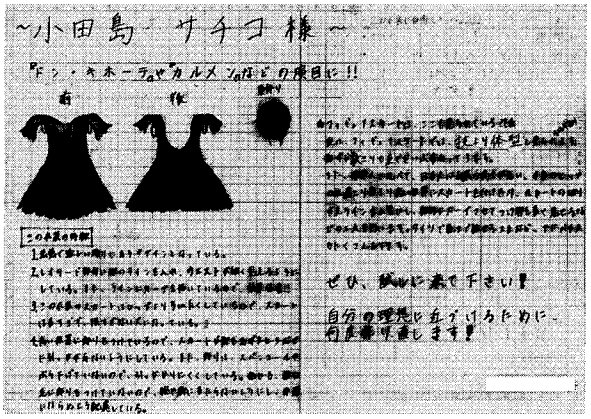
今年度２０１２年にロンドンオリンピックが開催された。そこで前期ではオリンピックで採用されている競技１種目選び、その競技についての個人で調べ、まとめて、その競技の魅力を他の人にも知ってもらう、という内容で行った。

ます自分が競技について調べ、実際に行われたオリンピックを見る。次にどのようにその競技の魅力を伝えられるかを考え、まとめた。スポーツの魅力は、実際の行われている競技を見た方がわかりやすいが、それを紙媒体で伝える。そのためにはどのような表現を用いればよいか、また発表の時に、どのように説明すれば伝わりやすいか、を考えると同時に、自分の調べた競技の魅力もしり、また他の人の発表を聞くことにより、様々なスポーツに興味を持ってもらおうと思い行った。



後期は、生徒の取り組みは前期同様だが、ある架空のスポーツ選手（女子フィギアスケート）を、オリンピックのメダリストにするために、スポーツ選手にかかわる職業知り、調べ、それをまとめ、発表した。





２．成果と課題

前後期とも、発表用紙に写真や図を多用し、有名な選手の紹介をしたり、また発表の際は、実際にその競技で使用されている道具を持ってきて実演するなど、いろいろな工夫が見られた。あまりメジャーでない競技を知ることができたり、スポーツ選手にかかわる仕事を知ることにより、スポ

English Newspaper

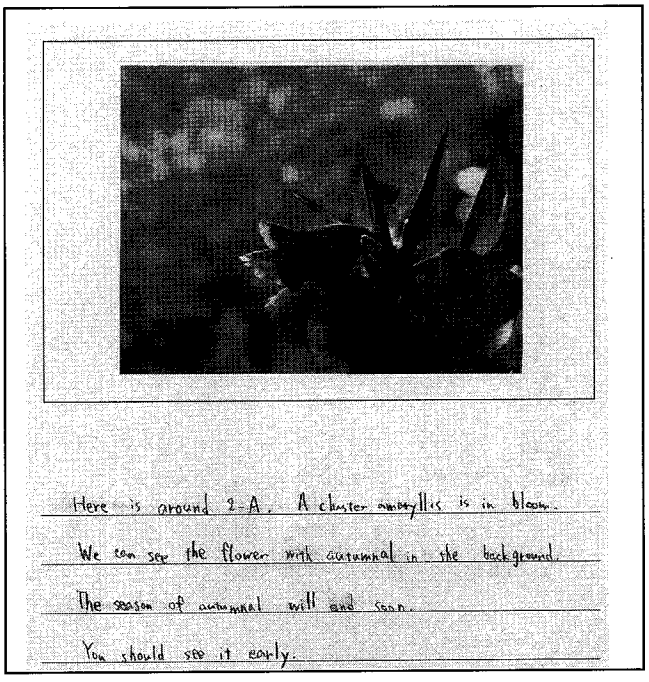
板野　麻由子

1．ねらいと内容

ねらい：

日本の新聞社が発行元であり，日本語の新聞と対応可能な英字新聞を活用することによって、英語の４技能（読む・聞く・話す・書く）を効果的に身につけることができる授業を展開することができると考えた。

さらに、中学生にとっては英字新聞を完璧に理解することよりも、情報を得ようとする態度を育てることが大切である。日本の新聞における同様の記事の表し方と比較することで、時事問題への興味・関心も引き出すことができ、ある情報について他者と交流することで、コミュニケーション能力の育成にもつながると考えられる。



内容：

①英字新聞特有の文法指導

時事英語クイズ

②テレビ番組紹介欄を読み、番組名の工夫に気づいたり、紹介文の書き方（時間、チャンネル、内容、出演者など）を学び、実際に書いてみる

③写真がメインの記事を読み、季節感あるものや思いがけないハプニングが題材として取り上げられていることに気づく。

実際に記事を書いてみる

④ニュース番組作成

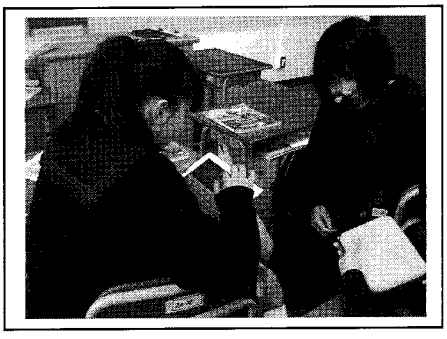
４人グループで１つの記事を選ぶ

役割分担

(アナウンサー、レポーター、カメラマン、編集担当)

台本づくり

ipad imovie を使用して撮影、編集



2．成果と課題

１グループ４人の構成は、活動内容に対して適正だったように思う。英字新聞を読み取るには個人では困難であるが、４人で辞書を用いて相談しながら訳すにはちょうど良い人数であった。ニュース番組作成については、ipad の使用法を他教科で修得していたり、中には非常に

iPadで映像表現

藤井　宏明

１．ねらいと内容

iPad の特性とねらい：Apple 社製のタブレット PC である iPad2 は、OS レベル及びハードウェアレベルにおいて非常に取り扱いが容易な端末である。取り扱いが容易である理由の一つには、構造の単純さによって、故障しにくい端末である点があげられる。そのため、iPad は教育現場での利用に適したコンピューターであると考える。また、iPad をはじめ、タブレット PC はその平板な構造ゆえに、机上に置くことで、複数名で、画面を見ながら、意見を交わし交流しながら使用するのにノートパソコンよりも適した構造をしている。このため、一つのテーマについて、議論しながら協同し作業を進めるのに適した ICT 端末である。

一般的にデジタルビデオカメラで撮影したムービーは、コンピューターに読み込みを行った上で映像編集ソフトを利用して編集しなければならないが、この端末は、フロントカメラとリアカメラを搭載し、iMovie 等の映像編集ソフトを起動すると、そのまま撮影したムービーを編集することが可能であり、授業時の取り扱いに非常に優れている。今回利用した iPad 用映像編集ソフト「iMovie」は簡易的な映像編集ソフトで、複雑で高度な映像編集は行うことができないが、撮影したムービーを速やかに編集し、表現することを可能にするソフトウェアである。

そこで、本授業ではこれらの特性をふまえて、子どもたちの中にグループを作り、映像の撮影、表現、編集をとおして協同作業を行うことで、コミュニケーション力や発信力を高めることを目指した。

授業の流れ：

上記の目標を達成するために、ハードウェアである iPad の説明及びソフトウェアの iMovie の使用法についての説明を 2 時間かけて行い、3 時間で表現内容の打ち合わせと撮影を行い、最後の 2 時間で映像表現及び、交流、生徒評価を行った。

２．成果と課題

iPad の使用は、スマートフォンが普及しつつある社会情勢において、多くの生徒が無理なく行うことができた。また、ソフトウェアレベルについては、iMovie の説明を行う際、ワークシートを iMovie の画面の写真のみとし、説明を聞きながら、自らマニュアルを作成する授業展開を行うことで、生徒の大多数が容易に使いこなすことができた。

iPad を用いた課題設定によって、撮影・編集を行う単元では、班ごとに全員で協力して意欲的に制作活動に取り組んでいる姿を見取ることができた。今回の授業ではコミュニケーション力という観点から、「相手に伝える」ことができる作品を目指すように指導を行った。その結果、生徒の作品には、アンケートをとったり、友達の実際に学校生活を送っている姿を組み入れたりすることで、附中生の特徴や生活を紹介しているものや、スポーツの解説、平和や友達との関係について詩的にまとめたものなど見られた。このことから、多くの班で相手を意識し、見せるための映像制作が達成されたと考える。また、映像編集の技術やアイディアの面では、柔軟な発想で映像制作されているものが見られた。具体的には、紙にイラストを書いて切り抜いたものを少しずつ動かしてコマドリ撮影を作成し、iMovie でつなぎ合わせることで美しいアニメーションなどが見られた。このよう

みんなでものづくり～２×４材を用いたものづくり～

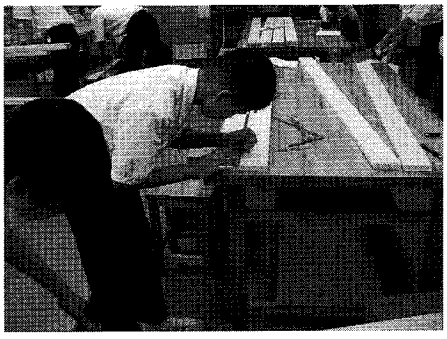
高河原　健

１，ねらいと内容

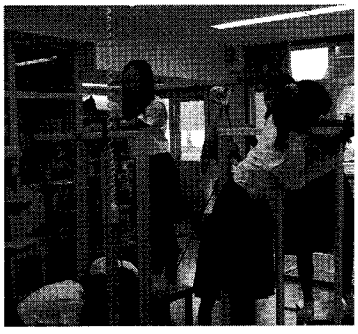
これまでに附中タイムで行ってきた「みんなでものづくり」を発展させ，今年度はよりさらに自由度を持たせた形で木工作品の設計から製作までを行わせた。使用材については，１×４および２×４材（ホームセンタなどで比較的安価に手に入るため）を用い，予算は 3000 円程度，また，製作物は，みんなで使用できるものという制約を設けた。重要となる設計作業には 1.5 時間程度の時間をかけ，機能面，構造面，デザイン面に十分配慮させることとした。生徒たちは，設計，製作の過程で毎時間，お互いに意見を出し合い，また，協力し作業することを通して，一つのものを作り上げるという活動を体験する。自分たちの考案した設計図をグループ全員で眺めながら，改善点や作業の効率についても話し合いながら製作に取り組む。このように，今回の授業のねらいは，ものづくりを通じた言語活動の充実である

・相談しながら設計図を完成していく

・材料にけがきを行う

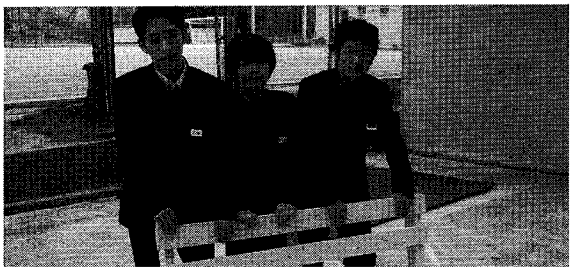


・組立ての様子



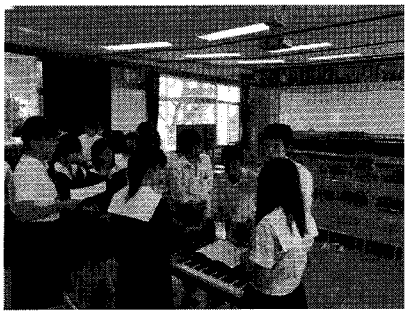
２，成果と課題

昨年までは，製作物をこちらで指定（ベンチ）していたが，今年度は，その指定を行わなかった。その分当然設計には，大きな時間がかかるわけであるが，その話し合いを重要視することでその後の製作時間の効率化も図ることができたように思われた。写真のように生徒たちは，一様に黙々と作業に取り組む姿が見られるが，自分たちのやるべきことが明確になっているからこその姿だろう。一つの設計図を通じて，各自が作業を分担し，製作する。また，課題にぶつかったときには，全員が知恵を出し合い解決に向かう姿も見られた。ここに紹介できなかった作品を含めると今年度はオリジナル 14 作品が完成した。その一つ一つに彼らの思いが詰まっているのでも



（前期）　楽しく歌おう！

小川　美紀

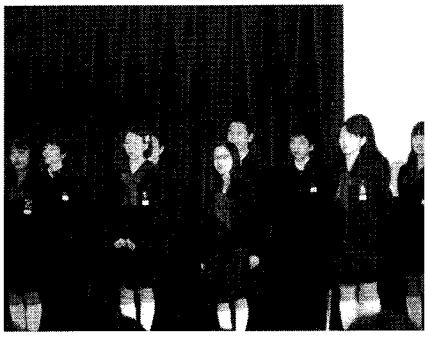


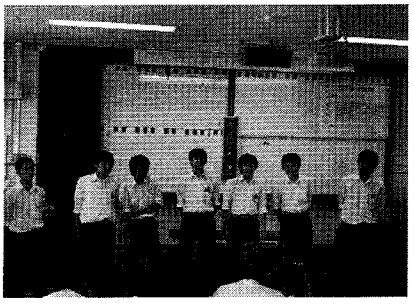
1．ねらいと内容

前期の附中タイムは、仲間とのコミュニケーションを大切にし、イメージしたことや、考えを出し合い、共有し、自分達で練り上げ、創り上げて、仲間と楽しく歌うことをねらいとした。内容として、全員で取り組む共通の曲（「チェリー」）とグループを作り、練習計画、選曲、アレンジ、ハーモニー作りなどの工夫をし、発表するという二つの取り組みをした。

2．成果と課題

グループ活動では、自分達の好きな曲が歌えるということで、積極的に取り組む姿があった。ハーモニーを作るのに話し合い、何度も作り直したり、歌い方の工夫をしたり、言語活動は充実していた。また、文化祭で発表するという目標もあって、がんばりたいという意欲も見られた。講座内での発表も、とても楽しく発表できた。課題として、今回は自由に曲を選び自分達で考えて、ということでの取り組みだったので、曲選びに時間がかかり過ぎてしまって練習時間が足りなくなり、仕上がりが不十分になってしまったグループもあったので、曲をある程度、用意しておく必要がある。音楽的に高いものをめざし、ひとりひとりが達成感を味わわせられるようにしていかなければならない。





（後期）英語でミュージカルを歌おう

吉田　雅子　　小川　美紀

1．ねらいと内容

英語科と音楽科において共に重要とする「表現する力」の育成を結び目とし、この授業では、英語でミュージカルを歌うことに取り組み、表現力豊かな子どもを育てることをねらいとした。具体的な内容として、「ウエストサイドストーリー」の”Tonight”と「サウンドオブミュージック」の“すべての山に登れ”の二つの作品に絞

＜生徒の感想より＞

・どちらもミュージカルなので、人物の心情になって歌うことができました。難しかったけど思いっき
り声を出して歌えて楽しかったです。もう少し違う曲も歌いたかったです。

・大人数で歌えて楽しかった。もっと音楽的に指導してもらいたかった（強弱の付け方とか、音のバラ
ンス etc.）し、英語の発音も直してもらいたかったけれど…こんなに大人数だから仕方がないかなぁと思
ったり。でも、雰囲気が明るくて楽しかったです。

・英語の歌を歌うことは難しいのかなと思っていたけれど、なんとか歌い終えることができて達成感で
いっぱいです。

・英語で歌が歌えるという講座でとても楽しかったです。英語の発音に気をつけながら音程を合わせら
れるのはとても難しかったです。

・細かい発音を練習したり、初めてミュージカルに触れたり、男子と二人で歌ったり、と初めてのことが多かったですが、いい体験ができて良かったです。

・両方とも英語で、難しそうだなと思っていたけど、歌が好きな人たち同士が集まって、たがいに教え合って、音楽の授業とはまた違う感じでした。すごく楽しかったです。これを機に、もっと英語の音楽に触れてみたいなと思いました。

・どちらも聞いたことのない、今まで知らなかった曲だったが、練習して上達していくたびにどちらの
曲も好きになることができた。また、今回の反省点も踏まえて、これからの音楽の授業でいかしていき
たい、そして、歌を楽しみたい。

2．成果と課題

生徒の感想からもわかるように、英語で歌を歌うことに興味を持った生徒がほとんどであった。そ
れらの生徒の前向きな取り組みのおかげで、この講座を楽しくすすめることができた。授業で扱っ
た曲もそれぞれのミュージカル作品では有名なものであり、歌う準備として物語から心情や曲想の
イメージを持つこともできたので入りやすかったといえる。生徒の感想からも、英語で歌えたこと
に満足し、今後の、英語や音楽という教科への取り組み方について考えるきっかけになった生徒が
いて良かったと思う。しかし、講座への参加生徒の数が多すぎたため、英語の発音指導や、音楽的

な指導をきっちりとできなかったことは指導
する側としては反省しなければならない。生
徒の感想にもその物足りなさは書かれていた
生徒の“楽しかった”という言葉にとても救
われたのは事実であるが、今後の附中タイプ
としての課題として、各講座の人数の調整を
し（ある程度均等にし）、集まってきた子ども
の半数以上が本当に満足できるような授業内

オーストラリア研修

英語科　吉田　雅子

１．ねらいと内容

このコースは、夏休み中に行われる「オーストラリア研修」参加者２０名を対象に、オーストラリア研修をより有意義なものにするために、研修旅行の事前準備と研修のまとめを行うことをねらいとする。

内容としては、以下のようなことを中心に行った。

① 英語小テスト（事前学習）

オーストラリアの生活で見聞きする英語について「絵を見て話せるタビトモ会話　オーストラリア」より出題し、オーストラリアでの生活に順応しやすくなるようにしている。

② オーストラリア学習（事前・事後学習）

オーストラリアがどのような場所であるかをビデオで見ておくことで、オーストラリアについてイメージを持たせる。また、研修旅行後には、研修中に生徒自身が体験したことや驚いたこと、また学校生活についてまとめ、文化祭で発表と展示を行う。

③ 協同研究　（事前・事後学習）

研修を通して、最も重要となるものである。しかし、日本で容易に行えることでも、オーストラリアに行くと容易ではないことが多々ある。そのことを踏まえ、準備や計画の段階で、注意しなければいけないことや知っておかなければならないことを中心に、日本で準備しておけること、オーストラリアに行ってからすることなど、生徒一人一人が見通しを立てて準備できる事前指導の時間をもった。

また、事後指導としては、各生徒がオーストラリアで行った協同学習について、レポートでまとめ、各自が行った内容と感想を簡単に模造紙にまとめ、文化祭の展示として発表した。

２．成果と課題

（１）成果について

事前指導の一環として、オーストラリア文化への興味付けができ、有意義な時間を持つことができたと考える。例えば、小テストという形を取ったが、生徒それぞれが、宿題という形で食事や生活に関わる語彙を学ぶことで、オーストラリア滞在中にどのようなものを食べたいか、どのような動物を目にすることができるか、など、生徒が希望と期待に胸を膨らませることができたと感じた。

また、附中タイム開始後、早い段階で、協同研究のテーマを１人１分間で説明させ、自分がどのようなことをやり遂げたいのかを明確にし、準備につなげることもできた。

（２）課題について

時間の制約があるため、事前指導も事後指導についても、十分なことができたとは言いがたい。